

「ふしぎな王様」

ルカによる福音書 19:28-40（新共同訳）

I 導入部

- みなさん、おはようございます。最初にお祈りをしたいと思います。心を合わせてください。...
- 教会暦、教会のカレンダーによれば、本日は「棕櫚の日曜日」と呼ばれる記念日です。
- これは、イエスさまが王であるということを知る日です。今週木曜日の「最後の晩餐」、そして金曜日の「受難日」、つまりイエスさまが十字架にかかれた日、そして日曜日の「イースター」、イエスさまの復活の前に、イエスさまがエルサレムに王として、王様として来られた。そのことを記念する日曜日が、本日の「棕櫚の日曜日」なのです。
- 「棕櫚」、すなわちなつめやしの枝を手に持った人々が、イエスさまを賛美した。棕櫚は、王様への賛美のために使われたそうで、だからこそ「棕櫚の日曜日」と呼ばれるのですが、この日、エルサレムに入られたイエス・キリストという王様は、「ふしぎな王様」でした。ふしぎな王様でした。
- この王様は、どのような意味でふしぎな王様なのか。そのことをご一緒に確認して、この方を、イエスさまをご一緒に礼拝していきたいと願っています。

II 本論部

一. ろばの子に乗った王様

- さて、イエスさまが、ふしぎな王様であることの第一の理由は、この方が、ろばの子に乗った王様であるからです。ろばの子に乗った王様であるから。
- イスラエル中を旅してこられたイエスさまは、いよいよ王として入城するために、エルサレムに向かわれていました。そしてエルサレムに入る直前、イエスさまは、二人の弟子に、不思議な命令を下される。
- 28 節から 31 節までをもう一度お読みしたいと思います。

19:28 イエスはこのように話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。

19:29 そして、「オリーブ畑」と呼ばれる山のふもとにあるベトファゲとベタニアに近づいたとき、二人の弟子を使いに出そうとして、

19:30 言われた。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、引いて来なさい。

19:31 もし、だれかが、『なぜほどくのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」

- この箇所は、本当に不思議な箇所ですよ。この後には、イエスさまが言われた通りのことが起こる。これを見て、「いやいや、イエスさまは、ろばの子の持ち主と事前に打ち合わせをしていたのではないか？」と言う人もいますが、そこはイエスさまですから、不思議なみわざというか、奇跡を行ったとしましょう。
- それもすごいのですが、ここでは、それ以上に不思議なことが起こっているわけです。イエスさまが言うとおりのことが、そのとおりに起こったこと以上に不思議なこと、それ

は、イエスさまが、エルサレムに入城するのに選ばれたのが、なんと「ろばの子」であったということです。

- 今も昔も、普通、王様が乗る者と言えば馬です。馬は、ろばよりもはるかに大きくて、堂々としていて、カッコいい動物です。こどもの国に行ったらいますが、カッコいいですよ。
- 現代でも、王様というのは高級車に乗るものです。5/1に新天皇が即位して、10/22に神道の儀式をもった後に、パレードが行われる予定ですが、かなりの良い車に乗るそうですね。オープンボディに改造されたトヨタセンチュリーで、8000万円ほどかかるということです。
- イエスさまも、王様であるなら、馬くらい乗るだろうと思いきや、あるいはせめて普通のろばに乗るかと思いきや、なんと、子ろばに、ろばの子に乗られたのです。
- お世辞にもカッコいいとは言えない、正直ダサい。弱っちい。今で言えば、ママチャリに乗ってるみたいなものですよ。
- 当時、ろばは庶民の乗り物であったと言われます。イエスさまは、ろばの子をあえて選ばれた。ここに、この方の不思議さ、不可思議さがあります。
- では、なぜイエスさまは、あえてろばの子など選ばれたのでしょうか？ここにはっきり書かれているわけではありませんが、まさにこのことはイエスさまがどのような方であるかを表していると思うのです。
- ろばの子は小さいので、イエスさまがろばの子に乗って、群衆のなかを進むと、イエスさまが見えなくなったのではないかという指摘もあります。ろばの子に乗ると、まわりに立っている人々と同じ高さになる。同じ目線くらいになる。
- 普通の王様は、馬に乗って、上から群衆を見下ろし、君臨します。以前もお話したかと思いますが、私の友人から聞いた話で、その方のお父様が、まだクリスチャンではないときに、初めて教会に来たとき、もう行きたくないと思われたそうなんです。どうして？と聞いたところ、このように言われたそうです。「教会に来ると、何かクリスチャンじゃない私を見下して、上から目線で『ここまで上がってこいよ』と言われているような感じがした。」
- クリスチャンであっても、弱く、愚かですので、時に誰かを見下してしまうことがあるかもしれない。しかし、イエスさまは、違う。私たちを見下して、上から目線で「ここまで上がってこいよ」と言うのではなく、むしろこの地上に下ってきて、私たちと同じ目線まで、降りてきて、共に歩んでくださる。
- また、馬は速いですが、ろばは、特に子ろばはゆっくり歩きます。「焦ることないんだよ」って言って、ゆっくり歩むために、あえてろばの子を選ばれたのではないかと思うのです。

二. 裏切り者の賛美を受け入れる王様

- 実は、メシアが、キリストが、救い主が、王様が、ろばの子に乗って来るというのは、実は、旧約聖書のゼカリヤ書に書かれていたのですが、この時点では、弟子たちはそれには気づかなかったということが、ヨハネの福音書には書かれてあります。
- 弟子たちとしては、「え？イエスさまろばの子を選んだの!？」みたいに、ちょっとおかしいなあ、不思議だなあと思ったのかもしれませんが、彼らは、それでも大喜びで、イエスさまとともにエルサレムに入っていきます。35節をご覧ください。

19:35 そして、子ろばをイエスのところに引いて来て、その上に自分の服をかけ、イエスをお乗せした。

19:36 イエスが進んで行かれると、人々は自分の服を道に敷いた。

19:37 イエスがオリーブ山の下り坂にさしかかられたとき、弟子の群れはこぞって、自分の見たあらゆる奇跡のことで喜び、声高らかに神を賛美し始めた。

19:38 「主の名によって来られる方、王に、／祝福があるように。天には平和、／いと高きところには栄光。」

- 自分たちの服をろばの子にかけること、そして服を道に敷くことは、当時の文化においては、その人を王と認める行為です。
- 弟子たちは、イエスさまを王として受け入れます。そして、賛美をしました。37 節によると、自分たちがこれまで見てきたあらゆる奇跡のゆえに、イエスさまの力あるわざを見たゆえに、高らかに賛美を歌いました。
- ここだけを見ると、素晴らしい情景ですね。しかし、この後のストーリーをたどっていくと、弟子たちはイエスさまが十字架にかかれる前の晩、イエスさまを裏切り、イエスさまを見捨てて逃げたということが分かります。
- 日曜日にはイエスさまを王さまであると認めて、高らかに賛美しておきながら、木曜日にはイエスさまを裏切り、見捨て、逃げていった。
- このような弟子たちの姿を、私は、全然笑えないなあと思うんですね。私たちは、礼拝に集うと、日々与えられているイエスさまの恵み、私たちの人生に起こる素晴らしいこと、奇跡を見て、イエスさまがしてくださったことのゆえに、イエスさまを賛美する。
- しかし、これは毎回言っていますが、この礼拝が終わった瞬間に、あるいはこの礼拝堂を出て、家に帰ると、イエスさまの素晴らしさを忘れてしまう。
- 苦しいことがあると、イエスさまを疑ってしまう。もうダメだって思ってしまう。
- 日曜日には、イエスさまを賛美しながら、イエスさまに信頼して、イエスさまについていきたいって思いながら、数日が経つと、イエスさまを裏切っているかのような行動を取ってしまうことが、私にはあります。
- 人間は変わりやすいんです。あるときは、熱く燃えていても、時が経つと冷めてしまう。あるときは、イエスさまを信頼していても、その次の瞬間には、イエスさまのことを忘れて、不安になって、イエスさまが悲しむような思いや言葉や行動に向かっていってしまうことが、私にはあります。
- イエスさまはふしぎな王様であります。普通の王様は、裏切るようなやつを、家臣にしないですよ。裏切ると分かっているながら、家来を雇わないですよ。
- しかし、イエスさまは、裏切ると分かっている弟子たちの賛美を、それでも受け入れられた。そして、裏切ってもなお、彼らを招き、彼らに力を与え、そして彼らを神さまのために、この世界のために用いるのです。
- この箇所を読むと、いつも思い出す歌があるのです。それは「私たちはロバの子です」という子どものための賛美です。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、こんな歌詞です。

私たちはロバの子です。馬のように速く走れない。ライオンのような力なんかない。ただのちっぽけなロバの子です。

だけどあなた知っていますか？ロバが主のお役にたったこと。イエス様を背中にお乗せして、エルサレムにお連れしたことを。

走れなくても、強くなくても、いつもイエス様がいてくれます。私たちはロバの子です。神様のために、神様のために、働きます。

- 私は自分を見ていると、カッコ悪いなあって思います。弱いなあって。力がないなあって。でも、イエスさまはろばの子を用いたんです。弱い弟子たちの賛美を受け入れ、赦し、力を与えたんです。
- イエスさまは、今のあなたを愛し、あなたの不完全な賛美を受け入れ、そしてあなたを変えてくださる。素晴らしいことのために用いてくださるのです。なんと、ふしぎな王様でしょうか。

三. 永遠の王様

- 弟子たちの賛美を聞いたファリサイ派のある人々は、このように言います。39 節からご覧ください。

19:39 すると、ファリサイ派のある人々が、群衆の中からイエスに向かって、「先生、お弟子たちを叱ってください」と言った。

- 彼らがなぜこのようなことを言ったのか。もちろん、確かなことは分かりませんが、一つの予想は、あまりに大騒ぎをすると、ローマ帝国の軍隊に目をつけられ、戦争になるのではないかと恐れたからではないか。そのような指摘もあります。
- それも確かに、ありうるでしょう。あとは、ガリラヤから来た田舎者の、無知な人々を見下して、そんな賛美など聞きたくない。うっとおしいと思ったのではないかという指摘もあります。
- あるいは、そもそもイエスさまが王であると信じていないから、そんな賛美など聞きたくないと思ったのかもかもしれません。
- いずれにせよ、イエスさまに賛美することをやめさせようとする力が存在した。イエスさまが王であることを否定しようとする力があったわけですね。
- 本日は、教会暦によると、「棕櫚の日曜日」とであると申しあげましたが、当たり前ですが、教会暦というのは、教会独自のカレンダーです。
- 今は西暦 2019 年ですが、これももともとは教会暦でして、AD とも言われますが、これは Anno Domini、すなわち「主の年」という意味です。「主」、つまり王様であるイエスさまが生まれてから何年かという数え方ですね。
- ちなみに、紀元前の BC というのも、before Christ、キリスト以前という意味で、歴史の、世界の中心に、イエスさまがいるという立場に立ったカレンダーであります。
- 日本は、もともとは全然違うカレンダーで動いていましたが、明治政府は、ヨーロッパ・アメリカに合わせて西暦をを導入しましたが、彼らは、それと同時に、天皇の即位から始まる「元号」による数え方を導入します。
- もちろん、元号は古代からありましたが、天皇が変わるタイミングで変わるわけではなかった。それを、西暦がキリストから始まるように、天皇から始まる数え方にしたので。さらには、たくさんの、天皇に由来する祝日を定め、それによって、天皇が王であるのということを、日本に生きる人々に広めようとしたわけです。
- もちろん、私たちクリスチャンたちも、この日本という国の中で生きている以上、そのような日本のカレンダーを使います。おかげで今年のゴールデンウィークは 10 連休です。
- もちろん、そのようなカレンダーを用いながらも、忘れてはならないのは、私たちの王は、私たち王様は、イエス・キリストであるということです。

- かつてこの国では、イエス・キリストが王であると言うことを、イエス・キリストを賛美することをやめさせようとする力が存在しました。あのクリシタンの時代、そして戦時中、その力が牙をむいたんです。
- しかし、イエスさまへの賛美をやめさせようとした人々に対して、イエスさまは言われました。40 節をご覧ください。

19:40 イエスはお答えになった。「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす。」

- イエスさまはまた不思議なことを言われるんですね。「石が叫び出す」とはどのような意味なのでしょう。
- これは、イエスさまを喜びたたえる声を止めることは不可能だということです。日本では、かつて、教会が、イエス・キリストが王であると表明することを、イエス・キリストを賛美することを、やめてしまおうとした時代が、特に戦時中にありました。
- イエスさまの弟子たちも、この後、イエスさまが逮捕されると、自分たちの命も危ないと、恐れて、逃げてしまう。黙ってしまう。
- でも、この人たちが黙っても、石が叫ぶ。石のような自然が、この世界が、イエスさまを賛美している。なぜか、イエスさまはこの世界の、この宇宙の王であるからです。
- 人々が黙ってしまっても、この世界はイエスさまを賛美している。今は、この耳にはそれが聞こえないかもしれない。この世界をイエスさまが支配されているとは思えないような現実が目の前にあるかもしれない。
- でも、それでも、この世界は、イエスさまが支配しておられる。石が、この世界が叫んでいる。そして、やがて、それがはっきりと分かる日が来る。
- 実は、ヨハネの黙示録においても、棕櫚が、ナツメヤシが登場します。開かなくて結構です。ヨハネの黙示録 7:9 をお読みします。

7:9 この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、

7:10 大声でこう叫んだ。「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、／小羊とのものである。」

- 終わりの日、新しくなったこの世界で、なつめやしを持って、イエスさまを賛美する日が来る。そのとき、弱さが、悲しみが、取り去られ、私たちは喜びに包まれる。
- そのときまで、私たちには弱さがあり、悲しみがあります。そのような私たちと目線を合わせ、私たちのペースで共に歩んでくださる。ろばの子に乗って、弱い私たちを用いて、私たちの賛美を喜ばれつつ、永遠を共に歩んでくださる。そんなふしぎな王様を、今日も私たちは礼拝したい。お祈りしましょう。